
フォーミュラ・ニッポン第7戦 RACE Report 2009/08/30 オートポリス
決勝レース

●小暮がポール to ウィン、ロイックが3位表彰台で7年ぶりのダブルタイトル獲得

午後2時30分、第7戦決勝がスタートした。ポールポジションの小暮はタイミングを逃し3位へ後退、10番グリッドのロイックは1コーナーで他の車両と接触しそうになり一瞬コースアウトしかけたが、何とか態勢を立て直し最後尾についた。序盤はペースが上がらず、2台とも苦しい展開を強いられる。僅かずつではあるものの、次第に前との差を広げられていたロイックは15周を終えてピットイン、15.2秒という素早い作業でチームはロイックをコースへ送り出した。3位を走行中の小暮も、21周を終えてピットに入り、暫定8位でコースへ復帰した。

20周を終えたあたりから、各車が次々とピット作業に入る。が、小暮とトップ争いをしていたマシンがピット作業に手間取りポジションダウン、全車がピット作業を終えた段階で、小暮は2位へ浮上。さらに、前を走るマシンは2ピット作戦をとっており、36周目には小暮がついにトップへ返り咲いた。ピットアウト後は別人のようにペースを上げ、終盤には1分36秒台のタイムを連発。最後まで手を緩めずにプッシュした小暮がポール to フィニッシュを飾った。

ピット作業終了後、最後尾から再び追撃を開始したロイックも、他のマシンがピット作業に手間取ったことで5位へ浮上。さらに2ピット作戦をとるマシンが後退し、表彰台圏内の3位まで浮上した。思ったほどはペースを上げられなかったものの、最後まで3位をキープしたロイックは表彰台の一角を確保。チームは1-3フィニッシュを決めた。

選手権争いでライバルとなっていたブノワ・トレレイエ選手が8位となった結果、ロイックのドライバーチャンピオンが確定、また、小暮がポールポジションから優勝を決め、チームチャンピオンも確定となり、NAKAJIMA RACING は最終戦を待たずに7年ぶりのダブルタイトルを決めた。

小暮卓史 優勝/1:28' 38.994/54周

「今日のスタートには、自分自身にあきれてしまうほどでしたが、自分たちの燃料搭載量は多いと思っていたし、前に付いていけばなんとかなるだろうとは思っていました。トップの伊沢選手が離れていったので、『本当に大丈夫かなあ』という思いもありましたが、ピット作業も全くミスなく送りだしてくれて、前に出ることができましたし、後半は安心して走行できました。中嶋さんが、僕らがスタートミスすることを予想していたので(苦笑)、燃料を多めに積んで出る作戦をとったのですが、本当にその予想が的中したので、すごく助けられた感じです。優勝できたことは本当に嬉しいし、最高のクルマを用意してくれたチームに感謝します。」

ロイック・デュバル 3位/1:29' 16.402/54周

「とてもタフなレースになった。昨日の予選で10番手となり、いいスタートは切れたが1コーナーでリチャード・ライアン選手とサイド・バイ・サイドになり、押し出される形で最後尾になってしまった。そのあとは燃料も多めに積んでいて重かったので、前についていくのがすごく大変だった。後半はそんなに悪くなかったが、ステアリングにトラブルが生じてしまって、ドライビングが大変だったが、結果として3位に入ることができて良かったと思う。」

中嶋悟総監督

「スタートでそれぞれがポジションを落とすことになり、いつものパターンかなという心配があったんですが、小暮選手に関しては前回の茂木で学習して、スタートを失敗した時の計算でガソリンを積んでいたの、ついて行ってきてさえいけば、あとはピットワークで逆転ができるであろうという自信はありました。ただ1台ぐらいかと思ったら2台に抜かれたもので、ちょっと伊沢君とのギャップに関しては心配したんですが、非常にうまく事が運んだということですね。ロイックに関してはもっと刺激的で、まさか一番後ろで帰ってくるとは思っていませんでしたから、ここはクリアな場所で走れるようにと早めにピットインを行いました。これが本当にうまく働いてくれて、前にいた人も2ストップでしたから、レース中も邪魔されることなく良いペースで走れました。とにかくいろんなことがあって、昨日はさびしい思いもしたんですが、それを挽回してくれたドライバー二人が最高の仕事してくれたと思っています。」